

《《》》
国語力には二つあると知れ

パソコンのワープロや電子メールの発達と共に、若い人を中心に多くの人々が文章を書く機会を増やしている。このことは、かつて言われてきた「人々は次第に文章から遠ざかり、読み書きの能力が衰える」という心配をなくしているように見える。では、「国語力」が向上したと言えるのだろうか。

文部科学省は文化審議会にこれからの社会で求められる国語力に関する答申を依頼した。その内容は、概略次のようになる。(一)筋道立てて物事を考える論理的思考力、豊かな発想の基となる創造力の基盤としての国語力、(二)伝統的な文化を理解し、豊かな感性や情緒を備えることや、知識や教養を持つための国語力、(三)国際化の進展に伴い、母国語で自分の意思を明確に表現できる言語能力、(四)ワープロやインターネットを活用するなど、社会の変化を考慮した国語力の向上である。

科学にとっての国語力とは？

間の感性を伝える国語力と、人間の思考を伝達する国語力の相違である。前者は文芸作品を読む力であり、また人間の感情を他人に伝え、共感を呼び起こす力である。一方、後者は人類の科学的資産を理

く、また地域や国が異なる人間の思考を伝達する国語力の相違である。前者は文芸作品を読む力であり、また人間の感情を他人に伝え、共感を呼び起こす力である。一方、後者は人類の科学的資産を理

での国語教育では、感じたことを作文にすることや文芸作品の読解など、その大部分が感性コミュニケーションの分野の教育に費やされ、科学的論理に基づく調査・分析などに関する論理コミュニケーション

らだろうと思われる。そして、その人たちは、日本語が持つ豊かな感性表現の力を最も重要と考え、論理表現能力のことをあまり考慮しなかったのではないだろうか。本来は、日本語という科目

解する力であり、論理を他人に伝え、合理的な意思決定を行う力である。

《《》》
合理的意思決定できる利点

単純化すれば、前者は右脳での感性コミュニケーション能力であり、後者は左脳での論理コミュニケーション能力といえる。これら両方が重要であることは言うまでもないが、今後は、特に論理を伝達する左脳でのコミュニケーションが重要となろう。

その理由は、感性コミュニケーションは比較的閉じた社会で有効であるが、そつでない場合には論理的コミュニケーションが有効になるからである。年齢が大きく異なれば共通の感性を持つことが難し

論 正



同志社大学工学部 教授 三木 光範

おり、ある程度の教育を受けただ人であれば誰でも、お互いに合理的意思決定ができる基盤を与えることになる。

このことを考えれば、これからの国語力に最も重要なのは論理的コミュニケーションであるにも拘わらず、我が国の国語教育はそのための対応ができていないと思われる。小学校から高等学校に至るま

ヨンの分野の教育は極めて少ないのが現状である。

《《》》
感性表現能力に過度の偏重

国語教育が感性コミュニケーションに偏重している理由はいくつか考えられるだろうが、最大の原因はこれまで国語に携わる人々が古典文学、和歌、俳句、小説、詩など、文芸の関係者ばかりだったか

で感性コミュニケーションと論理コミュニケーションの両方の基礎をしっかりと教育し、その上で自然科学と文芸の教育に分かれるべきであろう。もちろん、俳句に代表されるような日本語の持つ素晴らしい感性コミュニケーションの力は大事にしなければならないが、グローバル化が進む現在、地球的な規模で共同

論理伝達力を国語教育に取り入れよ

作業を行い、あるいは科学技術のさらなる発展を支えるために、論理的コミュニケーションの教育を国語教育の中に大幅に取り入れることが緊急の課題だと思われる。

まず、できることから始めたい。それは、子供たちにものごとの原理を説明させたり、仕事や作業のマニュアルを書かせることである。前者は用いる語彙や概念、そして因果関係の重要性を学ばせることに繋がり、後者は自分の考えを他人に伝えるということがどれだけ難しいのか、ということを理解することで説得力のあるコミュニケーションができることに繋がる。

こうした論理的で実践的なコミュニケーション教育が国語の教育として重視され、国語教師がこうしたコミュニケーションのエキスパートになることが新しい国語を産み出して行くだろう。もし、国語関係者が「こうした仕事は理科や数学、あるいは社会の教師の役割だ」と言うのであれば「国語」という科目名は「文芸」と変えるのが適切だ。

(みき みつり)